

性教育活動を通して思うこと

鈴木 和代

はじめに

健康文化の第48号では「多様な性と生」、第50号では「性の健康」について、本号では18年間取り組んできた性教育活動をもとに思いのままを書かせていただいた。実際の性教育の一部に触れ、「性＝生」であり「性教育＝人間教育」であることをご理解いただければ幸いである。

性教育グループ「ナーベルプラ座」の紹介

名古屋大学在職中に私が胎盤の研究をしていたことから、名古屋市科学館の依頼で「おへそとたいばん」の講義を子どもたち対象に行う機会があった。丁度、卒業研究を担当した学生が性教育に興味を持っていたことから、胎盤の講義の前に「赤ちゃんはどこからくるの？」と題して15分程度の劇を学生たちにしてもらった。このお産劇が好評で翌年から性教育の講座（対象：小学3年生～中学3年生＋保護者）となり、18年後の現在につながっているのである。

性教育グループとして歩み始めた頃、会に名前をつけようと皆で考えた。やはり胎盤（プラセンタ）とお臍（ナーベル）は名前に入れたいし、お産劇もやっているのでも入れていい…。それならば「ナーベルプラ座は？」という声に、会場は一瞬時が止まったかのように静まり、次の瞬間は一斉に腹を抱えて笑い転げたのである。言葉はなくとも笑いで一致の思いを共有した何ともゆかいな「命名」であった。ナーベルプラ座のお産劇でも赤ちゃんの「命名」は「いのちに名前を付けること」として大切に位置付けている。

活動を重ねる中で、ナーベルプラ座のメンバーも自然に増え多様性を増してきた。構成メンバーの中心は助産師であるが、看護師、保健師、医師、学校の教員、主婦といった社会人。学生では、助産師、看護学生、他学部生、専門学校生と様々である。「性教育＝人間教育」であるからこそ、多様な人材で構成することは好ましくかつ心強いものである。

科学館の活動が根付き始めると、小学校、中学校、高校からも出前講座の依頼が来るようになった。一人でも多くの子どもたちにナーベルプラ座の思いを

届けたいと参加可能なメンバーでやりくりをしつつ写真のような出前講座を行っている。

ナーベルプラ座の目的（規約から抜粋）は、「主に受精・妊娠・出産を通して『性の健康講座』を子どもだけに限らず、すべての発達段階における人を対象に実施し、その普及活動を通して自尊感情を高め、いのちの大切さを共感していくことを目指す。」ことである。会へのメンバーの出入りは自由である。会議は月1回開催し、出前講座の検討や学習会を行い、その間の連絡・相談は、メール会議が主である。ラインのような短文のやり取りではなく、メーリングリストの40名余りのメンバーが理解できる文章が前提となっている。そのメールでも活発な討論が行われ、貴重なコミュニケーションの場となっている。

性教育の実際と課題

「性とは何か」と質問されると、性には生物的、心理的、社会的側面からいろんな解釈があるので、人によっては性についての考えも気持ちも異なる。中には、性教育とは性器や性交について教えることと思いついでいる人も少なくない。しかし、性器を持つ人間のこと、性行動をする人間の生き様なしでは教育としては成り立たないはずである。性教育者の北沢京子氏は、「性教育は『生』の教育であり、生命の誕生から、からだと心の成長そして死までを考えさせ、自分の人生を自己決定できる人間を育てる教育でありたい」と述べており同感である。自己決定ができるには、その人の発達段階が関係し、単純に年齢で分けられるものではない。そこが性教育の一番むつかしいところと実感している。

「寝た子を起こすな」という言葉はよく聞くが、それでは子どもは守れない。なぜなら、子どもが納得できる知識を持って初めて自分や相手を守ることができると考えるからである。実際、幼い頃より性の知識のある子の方が性被害に遭いにくいと言われている。つまり性暴力の加害者は何も知らない子どもの方がターゲットにしやすいからである。性への偏見のない柔軟な子どもの頭の内に科学的に起こして自己決定できる力を徐々に身につけることが大切であると考えている。

ナーベルプラ座が出前講座を行った中学校での感想文の一部を紹介すると、「体の成長には個人差があり、心配しなくてもいいということが分かった」「お母さんが大変な思いをして産んでくれたんだなと思った」「家族に祝福されて生まれてきたことがわかった」等々肯定的な感想が多いので、自尊感情を高める効果は多少なりともあったと安堵することが多い。しかしながら、会場の子ど

もの中には、ずっと下を向いたままだったり、複雑な表情のままだったりする生徒の存在も気になるところである。事前の学校との打ち合わせのなかで予想する生徒のリスクについて検討を行い臨んでいても課題は残る。後のフォローは学校の先生たちをお願いしている現状である。



中日新聞 2013年11月16日

少なからずいるであろう「愛された記憶がない」「自分は生まれなければ良かった」と思っている子どもに「いのちの大切さ」を伝えることは容易ではない。我がメンバーの一人は、「愛される価値のない人なんていない。保護者以外にもあなたのことを、温かい目でみている人はいるんだよ！少なくともこの私は、あなたの幸せを願って『伝わって！』って思って話しているというメッセージを全身で伝えるようにしている」ときっぱりと語ってくれた。このように積極的に相手とつながろうと働きかける姿勢は、相手にも「つながろう」という気持ちの共感が生まれて子どもたちの自尊感情をたかめる大切な要素になりうると思っている。

性を取り巻く環境は年々変化している。児童（満18才未満）ポルノの弊害は昔からあったとはいえ、現在ほど問題視される時はない。幼い子どもがスマホやパソコンを親の目から離れて自由に扱える時代がきてしまったのである。世界を対象に沢山のことを調べられるインターネットは魅力的である。しかしながら、大事な個人情報が一瞬にして世界中の情報源にもなりうる危険性もある。そこを利用して相手をコントロールする性犯罪が後を絶たない。また、面識のない不特定多数の人とネット上でやり取りできる交流サイト、そこで知り合った相手から性犯罪などの被害を受ける子どもも増えている。一方、若者たちの間では「セクスティング」が注目される。自分のポルノ写真をインターネット上で交換するというものである。実際のセックスのように望まない妊娠や性

感染症さらにはセックスの場所の必要がない等の理由から、ヨーロッパの若者の中にも広がっているという。カップルの関係性がくずれると写真をおどしに使うなど性奴隷や性暴力の可能性が大きいので危険視されている。

インターネットの発展は、その便利さ故に人々の生活に大きく入りこんで来た。その中で若者のコミュニケーション能力は低下し、本来、性知識や性行動は人間関係の中で育まれるものであるのにインターネットの影響をもろに受けているのである。このような現状の中で子どもたちは性の自己決定能力を身につけ、豊かなセクシュアリティを身につけられるか。学校が、家庭が、社会が真剣に取り組まなければならない緊急課題と言える。

活動の中での出会い

私自身、この世には男と女だけが存在し、その男と女が互いの愛の対象になると何の疑問も持たずに大人になった一人であった。20数年前「全国性教育協議会」の会場で、思春期になって自分自身が同性愛者であることを知ったという真摯な男性の発言を聞いたことは、私にとっては目から鱗の体験となり自分自身が変わるきっかけとなったのである。その後においては、人間理解を重要な学問体系に持つ看護学・助産学の教育に関わる中で、自分なりにマイノリティの方たちの存在と尊厳を学生たちに伝えてきたつもりである。

私が性教育活動に携わるなかで、数々の貴重な人との出会いを体験することができた。その一部をここに紹介したい。

昨年のパリのテロで妻をなくしたアントワヌ・レリスさんとの出会いは新聞記事の中のことである。記事は何度読み返しても涙なしでは読めない。

「金曜日の夜、君たちはかけがえのない命を奪い去った。私の最愛の妻、そして息子の母を。でも、私は君たちに憎しみを与えない。君たちが誰かも知らないし、知りたくもない。だから、私は決して、君たちに憎しみという贈り物を贈らない。君たちはそれを望むだろうが、怒りで応えることは、君たちと同じ無知に屈することになってしまう。誰にも愛する自由は奪えない。…私と息子は2人になった。でも私たちは世界のいかなる軍隊よりも強いんだ。」

憎しみは憎しみで返さないアントワヌさんの思いに頭がさがる。「やられたらやり返す」という短絡的な考え方ではなく、悲しみの中にも愛する自由をいかに守りぬくかという生き方は豊かなセクシュアリティそのものであり、性教育の真髄に通じるものと思う。

最近、レズビアンのお母さんのお話を聞く機会があった。その娘さんは大学ではレズビアンであることをカミングアウトして大学生生活を楽しんでいたが、家族に話していないことが気がかりで、母親への告知に踏み切ったという。なかなか言い出せず苦しそうな娘さんであったが、何とか話してくれた時には「話してくれてありがとう！」と応え、その後は何日も泣き暮れたと言う。長い間気付いてあげられなかったことへの後悔の涙だったという。娘さんの要望で娘さんの祖父母には母親から伝えたという。「何とか治せないか？」と聞かれ、「治せない」と応えると「元気でいてくれたらそれでいい」という返事だったという。このお母さんは、自分がもっと同性愛についての知識と理解を持っていたなら、そういう性教育を受けていたならどんなに助かったかと話された。また、これまで子どもに対して生き方を強いる母親であった自分を反省していると。娘さんのカミングアウトを通して開かれた自分になれた様子であった。親どうしてもっとつながりたいと活動を始められており、泣き暮れた涙は大きなエネルギーに変化していた。

次は30代の男性で以前は女性（FTM）の方である。大人になってからテレビで「金八先生」を見て自分の違和感と向かい始めたという。カミングアウトは親しい友人や同じ違和感をもつ仲間の中から始め、家族はハードルが高かったが思い切って伝えたという。母親は今なお話をしてくれないと悲しそうな表情であった。この方に「私の知り合いには、男性から女性に性転換をした人が二人いて、二人とも男性と女性の強みを備えた賢くて魅力的な方たちです」と言うのとパッと明るい表情になり「そんな話初めて聞きました。嬉しいです！」と輝いた笑顔がとても印象的であった。

私が講師をした性教育の講演会に参加されていたマイノリティの当事者の方から後でメールが届き、講演のお礼とともに別の講演会やグループワークの紹介とともに次のコメントをいただいた。「少しずつ世の中が変化して、自分自身も、そして今同じように苦しんでいる人や子ども、これから当事者を育てることになるかもしれない未来に親となる人たちが生きやすい世の中になるといいなと思っています。いろんな人と接して、それをまた講演等で広げていただけると、とても嬉しく思います」。

微力な活動であるが、お会いする人たちの力をいただきながら、次への活動につなげていただいていることに深く感謝している。

おわりに 社会と性

『ムンメル なぜ子どもを産むのか²』という本の中で、以下のような北沢京子氏が興味深い訳文を書いている。

「子どもをつくる時は、男性と女性が必要はことはたしかです。けれど卵子が精子と結合してしまえば、男のひとはもう必要じゃないんです。なぜなら、男のひとがいなくても、卵子は子宮の中で育つことができるし、280日（正確には266日）たつと、生まれることもできるんですから。また、赤ちゃんは子宮の中から外へ出てきてしまえば女のひとはもう必要じゃないんです。なぜなら、誰だって赤ちゃんを育てることはできるし、誰だって、赤ちゃんを好きになれるのですから。だから、もし、今あなたがお父さんやお母さんと一緒に暮らしていなくても、淋しがることはいらないですよ。」

この本に評を載せている谷川俊太郎氏もこの文章が特に気に入ったそうである。

親から離れて暮らさざるを得ない子どもの立場に立った内容と言える。両親がそろった家庭ばかりではない。血縁にしがみつこう考え方や伝統的家族を強調する風潮は子どもの心を傷つけようことを考慮し、血縁がなくてもつながることのできる人間の強みを伝えていきたいものである。

社会においても性にとっても最も重視してほしい「個の尊厳」は日本国憲法にも明記されており、多様な性が輝ける土台であると確信している。また、性行動においてはプライベートな場面が多いので、自分と相手を尊重した対等平等な関係が特に求められる。そのためには、安全であたたかいつながりのある社会環境であることが望まれる。しかしながら、人間を取り巻く環境はますます格差が強まり、分断されやすかつながりにくい社会へと進んでいる。富める者と貧しい者、頭が良い人・悪い人、高学歴と低学歴、カッコ良い・カッコ悪い、仕事ができる人・できない人、さらには、男・女も二分化し差別やいじめが生じやすい構造にある。人間は、まさに沢山の側面をもち、多様であり奥の深い存在である。その多様な存在である人間にふさわしい環境づくりに、性教育活動もその一翼を担うと自負して活動をしている次第である。

定年退職し、年を重ねるごとに平和な社会を心より希求し、破壊・暴力を嫌う人間になっていることを実感する。『たたかう LGBT & アート³』の本の中で強調されている言葉「権利獲得運動を展開した先人の功績を忘れないこと」「歴史を忘れないこと」。まさにその通りである思う。そのために、ミクロの視点では性教育を地道に広げ実践すること、マクロの視点では、憲法九条を守って平和な社会を維持していくことが重要と思う。

ナーベルプラ座の名物であるお産劇の配役では、助産師役しかできない年齢となって久しいが、もう少し若い人たちと一緒に性の健康づくりに励んでゆきたい。また「生まれた赤ちゃんは誰も戦場には行かせたくない」と性教育活動を通して改めて思うこの頃である。

引用文献

1. 中日新聞、2015.12.13（日）日刊紙
2. フランシス・ヴェスティン著、北沢京子 文 : Munmek ムンメル 「なぜ子どもを生むのか」アーニ出版、1998.
3. 山田創平、樋口貞幸編：たたかう LGBT & アート 同性パートナーシップからヘイトスピーチまで、人権と表現を考えるために、法律文化社、2016.

(名古屋大学名誉教授、性教育グループナーベルプラ座代表)

